

## 日本の火山活動概況 (2008年5月~6月)

気象庁



図 1. 2008年5月~6月に目立った活動があった火山

## 三宅島 (34°05'37"N, 139°31'34"E)

5月8日06時54分頃、山頂火口でごく小規模な噴火が発生した。遠望カメラでは灰色の噴煙が火口縁上200mまで上がり、南東に流れるのを観測した。その後の現地調査では、山麓で降灰は確認されなかった。また、この噴火に伴って、振幅の大きな低周波地震(約3Hz以下が卓越する地震)と空振動が観測された。三宅島で噴火が発生したのは2008年1月7日以来である。

期間中、島内でDOAS(紫外線差分吸収分光計)を用いたトラバース法による火山ガス観測を4回行った。その結果、二酸化硫黄放出量は一日あたり1,300~3,400トンで、依然として多量の火山ガス放出が続いていた。また、三宅村の火山ガス濃度観測でも、山麓でたびたび高濃度の二酸化硫黄が観測されている。

火山性地震は増減を繰り返しながらやや多い状態が続いている。発生した地震のほとんどがやや低周波地震(約3~10Hzが卓越する地震)で、高周波地震(約10Hz以上が卓越する地震)も時々発生した。震源はいずれも山頂火口直下浅部と推定される。火山性微動は観測され

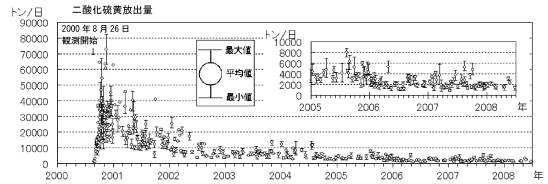


図 2. 三宅島 火山ガス(二酸化硫黄)放出量の変化(2000年8月~2008年6月)

なかった。

山頂火口の噴煙高度は火口縁上100~200mで推移した。全磁力観測では、火口直下の熱帯磁が鈍化しながらも続いている。

GPS連続観測では、山体浅部の収縮と深部の膨張が継続している。

## 硫黄島 (24°45'03"N, 141°17'20"E)

独立行政法人防災科学技術研究所の観測によると、地震活動は落ち着いた状態で経過している。一方、国土地理院の観測によると、2006年8月以降みられている島全体が隆起する地殻変動が継続している。

## 福徳岡ノ場 (24°17.1'N, 141°28.9'E)

福徳岡ノ場付近の海面で、6月12日に第三管区海上保安本部が行った上空からの観測により白色の浮遊物が、また6月25日に海上自衛隊が行った上空からの観測により変色水が確認された。いずれも火山活動によるものとみられる。

## 阿蘇山 (32°53'01"N, 131°05'49"E (中岳))

中岳第一火口の湯だまりの湯量や表面温度に上昇傾向が見られたが、湯量には大きな変化はない。中岳第一火口南側火口壁の一部の噴気孔では引き続き赤熱現象が確認されている。

孤立型微動の回数は一日あたり300回程度と多い状態が続いているが、これらの振幅は概ね小さいものであった。

6月6日及び18日に行ったDOAS(紫外線差分吸収分光計)を用いたトラバース法による火山ガス観測では、二酸化硫黄放出量は一日あたり200~600トンで、やや少ない状態が続いている。

## 桜島 (31°34'38"N, 130°39'32"E (南岳))

昭和火口では、噴火が5月と6月にそれぞれ27回、19

回発生し、うち爆発的噴火もそれぞれ4回、14回発生した。これらのうち、弾道を描いて飛散する噴石が最大で5合目(昭和火口からの水平距離で500mから800m)まで達したが、火砕流の発生はなかった。このほかごく小規模な噴火も時々発生した。6月14日以降は、28日に爆発的噴火が1回発生するにとどまった。

夜間には、5月2日から7日及び6月3日から5日にかけて、高感度カメラで捉えられる程度の火映が、昭和火口で観測された。

南岳山頂火口では、5月20日に爆発的噴火が1回発生した。

島内のDOAS(紫外線差分吸収分光計)を用いたトラスバース法による火山ガス観測では、二酸化硫黄放出量は、5月2日の観測で一日あたり1,300~2,300トンであったが、5月26日、6月6日の観測では一日あたり400~900トンとやや減少した。

火山性地震及び火山性微動は少ない状態で経過している。

国土地理院のGPS連続観測では、始良カルデラ(鹿児島湾奥部)の地下深部へのマグマ注入による膨張が続いている。また、傾斜観測では、3月中旬から山頂方向が上昇していると考えられるわずかな変化が継続している。

#### 薩摩硫黄島 (30°47'35"N, 130°18'19"E (硫黄岳))

硫黄岳山頂火口の噴煙活動は依然としてやや活発な状態が続いており、噴煙高度の最高は火口縁上500mであった。

火山性地震はやや多い状態が続いている。発生した地震の多くがB型地震で、A型地震も時々発生した。いずれも震源は硫黄岳山頂火口直下と推定される。また、振幅が小さく継続時間の短い火山性微動が時々観測された。

#### 諏訪之瀬島 (29°38'18"N, 129°42'50"E (御岳))

6月17日に爆発的噴火が発生し、23日及び27日には小規模な噴火が発生した。

火山性地震及び火山性微動は消長を繰り返しながらやや多い状態が続いている。

(お知らせ)最新の火山活動解説資料は気象庁ホームページの以下のアドレスに掲載しています。

URL [http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly\\_v-act\\_doc/monthly\\_vact.htm](http://www.seisvol.kishou.go.jp/tokyo/STOCK/monthly_v-act_doc/monthly_vact.htm)

(文責: 気象庁地震火山部火山課 道端秀和)

## ○教員公募

### 【立正大学地球環境科学部】

1). 所属: 地球環境科学部環境システム学科

2). 分野・資格: 環境地学

固体地球表層の環境科学に関する十分な研究業績があって、博士の学位を有し、岩石、地質、土壌、第四紀等のうち複数の分野を含む地学関係の学部教育および大学院学生の指導(いずれもフィールドワークを含む)を熱意をもって行い、地球環境に関する共同研究にも積極的な者。

3). 職階: 教授または准教授

4). 採用予定日: 2009年4月1日

5). 提出書類: (いずれもA4判縦置き横書き。)

履歴書(写真貼付。所属学会を記す。)

研究業績調査書(各業績について査読の有無を記す。)

主要論文5編の別刷またはコピー

研究教育の抱負(1500字程度。)

人物等についての照会先(2名の氏名・連絡先。)

6). 書類送付先および応募期限:

〒360-0194 熊谷市万吉 1700

立正大学地球環境科学部長 米林 伸

(封筒表面に環境地学教員応募と朱記し、簡易書留とすること。)

2008年8月22日必着

7). 問い合わせ先:

〒360-0194 熊谷市万吉 1700

立正大学地球環境科学部 田村俊和

e-mail [tamura@ris.ac.jp](mailto:tamura@ris.ac.jp)

注 学部・学科の概要は <http://ris-geo.jp/intro.html>,

<http://www.es.ris.ac.jp/~es/>

等を参照。

複数の候補者に対して9月上旬に面接を行い、その際健康診断書の提出を求める。なお、旅費は支給できない。採用後は熊谷校地の近くに居住すること(片道1時間程度以内が望ましい)。

(上記のお知らせは火山学会メーリングリストに7月7日送信しました)

## ○テニュアトラック研究員公募

### 【愛媛大学】

愛媛大学ではテニュアトラック研究員(上級研究員)6名を公募中です。このうち2名が地球深部ダイナミクス研究センター(GRC)と強い連携のもとに研究教育をすすめていただく予定で、任期終了後は審査の上准教授等として任用予定です。

またGRCを中心として本年度採択されたグローバル